

---

## 配偶者は誰？

-シンジ-

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

配偶者は誰？

### 【Nコード】

N5657F

### 【作者名】

- シンジ -

### 【あらすじ】

入学者の中にいる“配偶者”。そいつを見つければ願い事を叶えてもらえるが、間違えれば退学。毎月出されるヒントで、見つけることが出来るか…。

## 01・相沢 一郎

「よし！」

俺は相沢一郎、今日から高校生になる。

緊張をしていたので、気合いを入れて入学式の会場である体育館に入った。

「同じクラスだな！」

やっと見つけた自分の席に座った時、後ろから声をかけられた。

「真志か、また同じクラスメイトとしてよろしくな」

そこに立っていたのは、中学の時もクラスメイトの遠藤真志だった。

「お前…、なんか気持ち悪いぞ。わざわざそういつのを言うのは」

「うるさい！」

「そういえば、高校に入ってもサッカー続けるんだっけ？」

「ああ、お前は高校に入っても部活やらないんだろ」

「分かってるじゃん。でも、バイトは探そうかなあ」

「いやいや、禁止されていますから」

「真面目くん、だから君はあまいのだよ。アルバイトをやったって  
そうそうばれるもんじゃないっしょ」

君の方が考えが甘いような気もするんだけど。

町内の高校だから、アルバイト先も近くなると思っただよな。

「勝手にしろ」

「ははは、冷たいねえ。取りあえず、もうちょっと様子を見てから  
考えるけどね」

「入学式始まる前から校則を破ろうとするなよな……」

「なんか言った？」

聞こえてないなら別にそれでいいや。

「そろそろ座った方がいいぞ」

「それもそうだな」

しばらくすると入学式が始まった。

「相沢君知ってる？」

教室に向かっている時、後ろの人がいきなり話しかけてきた。

「えっと…」

この人は誰だろう。

クラスメイトだろうけど、何で俺の名前を知っているんだ？

「朝倉加奈よ。入学式で全員名前呼ばれたじゃない。その時に覚えておいたの」

心が読まれているかのように、聞く前に疑問に思ったことに答えてくれた。

「なるほど、よろしく。それで知ってるって何のこと？」

平常心ではいるけど、入学早々に女子に話しかけられてちょっぴりうれしかったりする。

「去年からここの校長が変わったらしんだけど、その校長が面白いことをやってるらしいよ」

当然、入学式で校長の挨拶があったので顔を思い出す。

定年過ぎてるんじゃないかって位の歳のおじいさんだった気がする。

「面白いこと？」

「そう、入学者の中に一人だけ入学金とか授業料が免除になっている人があるの」

なんだそれ。

「意味が分からん」

「話はここからよ。その人を見つけた人は同じ待遇を受けて、願い事を一つ叶えてくれるらしいわ」

そりゃすごいけど…。

「そいつは見つかっても何もないのかよ」

「そりゃあるわよ。去年と同じなら、選ばれた人は入学式前に校長に呼ばれてルールを説明されるらしいわ。ペナルティは単純に退学ともう一つあるらしいけど、それは選ばれなきゃ分からないわ」

信憑性は薄いけど、確かに本当なら面白いな。

入学式前に呼ばれた奴…か。

「“配偶者”って、選ばれた人を呼んでいるらしいわ」

「でも、どうやって見つけるんだよ」

入学したのは320人ぐらいいるはずだ。

「毎月ヒントが出されるらしいわよ。聞いた話だと、はじめのヒントは今日」

「そりゃ楽しみだ」

らしいらしいって言いすぎだろ。

噂を真に受けるタイプなのかね。

そう思っていると、いつの間にか教室の前だった。

「今日はそれだけだな。なんだこれ…?」

担任の橋口長治先生は連絡を終えたと思ったところで、あるプリントに目をとめた。

「報告しろって書いてあるんだが内容が分からん…、一応言っな」

そついうと、橋口先生をプリントを読み始めた。

「えーと、『“配偶者”はA組の中にいる』って書いてあるだけだな…。今日は以上だ」

配偶者はA組の中に…。

「ほらね。あと、言い忘れてたけど間違えたら退学らしいから、チヤンスは一回よ」

後ろから声を聞きながら思う。

面白そうだ。

俺も含めて40人の中に入ることか。

## 01・相沢 一郎（後書き）

初めて書きました。

設定はありますが、ちゃっかりコメディーにしようかなって思っています。

コメディーが好きだからとかじゃないですよ！多分！

当分は…、というかあんまりコメディーにするのは難しいかも知れませんが。

続き頑張って行こうと思います^^



## 02・朝倉 加奈

「うん…」

あの話は本当だと思う…。

でも、入学式から一週間経つのに全然分らない！！

知らなかったように見えた相沢君だって、まだ確実に白という訳じゃない。

それ以前に、クラスメイトのことを良く知らない以上、断定はまだまだ難しいのはしょうがないんだけど…。

「加奈ちゃんどうしたの？」

「まあか、なんでもないよ」

栗原真央、優しくておとなしい性格の子で、自然と話すようになった。

「もしかして、また“配偶者”のこと？ そんなに叶えたいことでもあるの？」

人には言えないけど、確かにある。

去年の人の有り得ない願い事が叶ったんだから、私の願い事も叶うはずって思ってる。

それも、聞いた話になっちゃうんだけど…。

「そんなことを聞くまおは願ひ事はないの？」

「そりゃあ…、白馬に乗った王子様が迎えに来てくれるとか」

「教室まで馬が入り込んだら大騒ぎね」

「アイドルになるとか」

「保育士になりたいって言ってなかった？」

「友達百人できるとか」

「案外いけるわよ？」

「あとはねえ…」

「いや、もういいわよー！」

本当になえてほしいとか思っでないでしょ。

「そうだよねえ、授業に遅刻しちゃうもんねえ」

真央がそういい終わると同時にチャイムが鳴った。

「移動教室だったわよね」

「教室にいるのは私たちだけだよねえ」

呑気にしゃべってる場合じゃないじゃない！

「お腹ぺっこぺっこだよ！」

「うるさいわよ、一緒に食べないわよ？」

今はお昼休み。

「そんなこと言っちゃだめだよ。志保ちゃん、一緒に食べようね」

私と真央、板垣志保の三人で机を借りてお弁当を広げ始めていた。

「まおちゃんは優しいわ！ 惚れ直しちゃった！」

正直、いつものこととはいえ、ちょっと引くわ。

「気持ち悪いこと言ってんじゃないの」

「可愛いんだからしょうがないだろ」

「女の子にそんなこと言われてもうれしくないよお」

顔を赤くしながらいう真央。

変な関係に発展しなきゃいいんだけど…。

「そつえば、橋口先生って今年入ったばかりだろ？」

「そうね、だから配偶者のことを知らなくても当たり前」

「またその話するのぉ？」

真央はこの話にあまり興味が無いのかもしれない。

「当たり前だろ！ 私はまおちゃんと一生を共に過ごせるようにという願いがあるのだ！」

「冗談だよねえ？」

「素で言ったら友達という枠から私は抜けるわ」

「まおちゃん、そんな目で私を見ないで！！ 加奈はどうでもいいけど」

「なんでよ！？」

「いやだって…、魅力が感じられないし…」

「女として、それは聞き捨てならないわよ？」

「そうだよお、見た目は綺麗なんだから」

「引つかかる言い方な気がするのは気のせいかしら？」

「落ち着けよ！ 弁当食べちまうぞ？」

そう言いながら、私のお弁当に手を伸ばす志保。

「私もお腹が空いてるのは同じなんだから、そんなことは許さないわよ！」

「あはは、本当に食ったりしないって」

「どうなんだか」

「そういえば、配偶者を見つけてることわざ」

いきなり、真央が話題を戻した。

あまり興味のない話題だと思ったんだけど…。

「誰だか全然分からねえけどなあ」

「見つけるって事は、…その子を犠牲にするってことだね」

「……」

確かにそうかもしれないけど、ただのクラスメイトよりも私は願  
い事を選ぶうと思っている。

自己中心的なのかもしれないけど…。

だから、私はとても冷ややかな目を今しているかもしれない。

「…そうなるのか。でもよ、ただのクラスメイトよりも叶えたい夢  
を取る奴の方が多いと思うぜ？」

「それが私でも…？」

その言葉に、私の考えが揺らいだ。

「なんてねえ」

「ちよっ！！ いきなりキャラ戻ったわね！」

一瞬で真央の普段の雰囲気に戻って、少し送れて私は言葉を発した。

「驚かしやがって！ お茶目ちゃんじゃねえか！」

「あなたの目には、まおちゃんがプラスにしか映ってないの！？」

「そういえばあ、配偶者も１年間ばれなかったら願い事を叶えてもらえるらしいよ」

そういえば、先輩から聞いたとき、そんなことも言っていた気がする。

私は探す方だって分かってたから忘れてたけど。

「私達には関係ないけどね」

「だな」

「そうだよねえ」

関係ないと言ったけど…、本当にそうなのかしら？

## 02・朝倉 加奈（後書き）

視点を一話ごとに変えていきます。

一応、主人公的な人物を定めようとは思っています。

誰なのか簡単に分かつちゃったらごめんなさい><

### 03・阿部 舞歌

「いい天気だなあ……」

入学して約半月が過ぎました。

友達が出来るか不安だった舞歌にも、クラスに馴染めてきています。

「本当にいい天気だな」

今にも寝そうな舞歌の呟きを聞いていた人が居たみたいです。

「そうだよねえ、ずっとこの席がいいなあ……。遠藤くんはどう思う？」

「俺は窓側よりも、早く食堂にいける廊下側になりたいわ……」

「お弁当持ってくればどうかなあ……。このぽかぽかなのは捨てがたいと思うよあ……」

「確かにそうかもな。俺、今にも寝ちゃいそうだし……」

「私もあ……」

「でも弁当作るの面倒だし、食堂の料理は全部うまいし……。うーん……」

「次の授業って何だっけえ……」



「2時間目だからあ……。何か忘れたけど教室だったのは覚えてるから、寝ても大丈夫だろ……」

「そっかあ……」

その言ってから1分も経たないうちに、二人の小さな寝息が教室に聞こえることになった……。

チャイムの音が聞こえて夢の世界から脱出です。

夢の中でも、雲の上で寝てたような気がするなあ……。

「起きろ、私の席だぞ！」

後ろから志保ちゃんの声が聞こえるから、遠藤くんはまだ起きてないみたいです。

「おわっ！？ 机を引くな！！！」

舞歌の椅子にも軽く机らしきものが当たる。

横に引いたのかな。いつものことだから、あまり気にしなくていいよね。

「早く自分の席に戻れよ！ チャイム鳴ってるから、いつ先生が来てもおかしくないんだぞ？」

「机を返せ。一番前の席は寝れないから嫌でござる」

「まだ夢の中か、お前は？」

「バカか？ そんなわけないじゃん」

「死ね」

そのあとの遠藤くんの悲鳴と、先生の扉の開く音が重なった。

先生もいつものことと思って、気にしないみたいです。

「左利きだったの？」

「そうだけど、今更気付いたのね」

お昼休み、森本恵ちゃんと一緒にお食事中です。

「今更でござるー」

「何言ってるの？」

変なものを見る目で見られてしまった。

「遠藤くんの真似してみただけだよ」

「真志か…、あいつって誰とも仲良くなるけど怪しくない？」

名前で呼んでるのは、恵ちゃんも仲がいいのかな。

「恵ちゃんの方が怪しいよお」

「…なんで？」

「頭が良くて人間かどうか怪しいでござる」

「ござるって語尾、なんかはまりそうでござるー」。

「そういうことじゃないってば。配偶者の話よ」

ボケたのにスルーは寂しいです。

「うーん、どうなんだろうねえ」

そういう恵ちゃんも怪しいと思うんだよね。

もちろん、配偶者の話です。

あまり興味ないんだけどね。

「だって、友達が多いってことは、それだけ情報を手に入れやすいってことじゃない」

「探す側の方が、情報は必要だと思うよお」

「ヒントが少ないから、まだ直感的に思っただけなんだけどね」

「逆にさ…、誰とも話さないような人の方が怪しいんじゃない？」

そついいながら、舞歌達のクラスにだけ配られたクラス名簿のよ

うなプリントを取り出した。

「確かに、自分の情報は極力もらしたくないか…。これからヒントが出されてくるんだもんね」

「そういうことお…。男の子だったらこの子、女の子だったらこの子とかかな」

言いながら、名前を指差していく。

クールで見た目もカッコいい『黒川泰明』くんと、綺麗だけど冷たい目をしている『吉井絹子』ちゃんだ。

どちらもクラスに馴染めていないように見えるんだよねえ。

「うーん…。まだまだ分からないわね」

「推測するより観察することの方が今はいいかもねえ…。例えば、誰が仲がいいかとかね」

「あんだ…。本当はやる気満々なんじゃない？」

そのつもりは無いんだけどなあ…。遠藤くんが疑われたのはうれしくなかったけどねえ。

言わないけど。

「そんなことないよお…。それより、食べ終わったらまた寝ようかなあ…」

夢の続きが見たいなあ…、進展していく夢じゃないけどねえ…。

「次は移動教室だけだね」

「そっかあ…、お休み…」

「関係無しに寝るのね、いつの間にか食べ終わってるし。私は」

恵ちゃんの声を途中から遮断して、夢の世界に落ちていった。

楽しい夢になりますようにと思いながら…。

### 03・阿部 舞歌（後書き）

ちょっとコメディーっぽくしたつもりですが…どうでしょうか？

なにかあったらメッセージお願いします><

## 04・板垣 志保

「毎日邪魔だよ！」

教室に来て最初にやることは、朝っぱらから寝ている真志を私の席から引きはがすこと。

「毎日暴力で解決しようとするなよ！」

人の席に座っておいて、鞆で殴ったことが氣にくわないようだ。

「ちよっ！ 俺が悪かった！ だから、椅子を下ろせ！」

今日の私はそれだけじゃ済まなかった。

「口で言っただけ分らないのが悪いんだよ！」

「いやいやいや、そこまで怒ることなくない！？ 隣の義人くん、椅子取られて困ってるじゃん！！」

そこまで言われても、私が機嫌の悪い時もふざけたことをしているのがいけない。

「うるさい！！」

妹のことで、私は心底機嫌が悪かったのだ。

ガンッ

私はその瞬間、感情的に怒りをぶつけてしまった…。

「殺す気か！？ 俺が悪かったけど、先ずは頭冷やせよ！！」

冗談だと思っていたクラスメートの動きが止まったように見えた。

「聞いてるのか！？」

そして、私の思考は平常に戻った。

「…ごめん」

真志が普段通り騒いでいたおかげで、クラスメートはすぐに自分達の会話に戻った。

でも、結構本気で私が振り落とした椅子を蹴り返して平気なはずがない…と思う。

「お前が素直に謝ると気持ち悪いな」

なのに、真志は笑った…。

「…バカ」

その時、教室の扉が開いた。

「遅れてすまん、席に着きなさい」

いつの間にかチャイムは鳴っていたようだ。



「なんで校長なの？」

みんなの気持ちを代弁するように真志は言った。

「お前等の新米教師が風邪を引きおったからじゃ。話すこともあったから、ちよつとよかったがな」

そういえば、校長が配偶者の奴を考えたってバスケット部の先輩が言ってたっけ。

だとすると、あの話は本当だったのかな。

「皆知っていると思うが、わしの考えたゲームの説明をする……」

そう言つと、校長は何か企んでいるような怪しい笑顔を作った……。

「先に言つとくと、先輩達から話を聞いている奴もいるかもしれんが全てが同じなわけじゃないからな」

ほとんどの人がちゃんと校長の話を聞いている中で、二人だけ話を聞いていないように見える人がいた。

「まず、最初のヒントとして『“配偶者”はA組の中にいる』と、新米教師が忘れていなければ伝わるとるはずじゃ」

頭の後ろで手を組んで一番後ろの席で寝ているのは確か、山下雅史。喧嘩がめちやくちゃ強いらしいけど、結構ノリのいい人だ。

私は話安かったりする。

「そして、1年A組にしか参加資格がないことにした。去年は退学者が内定が決まっとった3年の中からも出てしまったからなあ」

もう一人は読書に勤しんでいる、野崎泰明。

この人は、静かで自分から他人と関わろうとしないから私とは性格が合わないそう。

って、私との相性なんて興味ないか。

「まず、このクラスにいる“配偶者”を見つけられた者には金銭面での免除とわしの力でどんな願い事も叶えてやる」

校長先生が軽はずみな発言が出来るはずが無いと思うから…、やはり、なんでも願いが叶う…？

「だが、一人一回だけしか選択権はないぞ。間違えたら即退学、他にもペナルティがあるが、それは間違えたらのお楽しみじゃ。当てたら、配偶者の方が退学じゃがな」

そつえば、私も周りを気にしてちゃんと話を聞いていないうちの一人かもしれない。

正直、願いは自分で叶えるものだと思っているから。

「まあ、すでに選んでいる奴があるが、ふざけ半分であつたし、女子だったので免除にしたいぞ。心当たりのある奴で、本当にそう思ふのなら、本人に言ってみることじゃ」

……心当たりがあります。

男子バスケット部の米倉圭吾に言った気がする。

というか、どこで聞いてたのよ!?

「長くなってもしょうがないからの、二日ほど早い次回のヒントを言っとくぞ」

私の心の叫びは届かなかったようだ。

「“配偶者”は学校を休まない、じゃ」

ヒントにならないわね…。

今の所このクラスの出席率100%だもの。

「以上じゃ、本格的なゲームの始まりじゃぞ」

そういうと、校長は笑いながら教室を出て行った。

変な人だな、略して変人だな。

「良いこと思いついたんだけどお、聞いてくれる?」

今は楽しい昼休み、そしてランチタイムだ!

毎日のように、真央と加奈との二人と一緒に食っている。

「配偶者の話で？」

加奈がそう言ったのは、今の話の流れからだろう。

「そうだよお」

「どんなことでも、命じてください！」

真央のためだったら、どんなことでも命がけで試して見せます！

「志保、意味が分からないからしゃべらないで」

「まあまあ、それでねえ…、配偶者を演じるっていうのはどうかな？」

「「え？」」

珍しく、私と加奈の声が重なった。

演じるって、どゆこと？

「配偶者を演じてる自分は、配偶者じゃないって分かるよねえ？」

「ええ、そうね」

「うんうん」

「でも、他の人は分からない。それによって、もし間違えてくれればライバルは減って、間違えた人は配偶者じゃなくなるから、私達は見つけやすくなるって思わない？」

真央のその発言に、なんだか違和感を覚えた。

真央は、配偶者を見つけたらその子を犠牲にすることになるって感じのことを言っていたことがあったからかもしれない。

「確かに、それはいいかもしれないわね」

「よし、早速やってみるか！」

「早速？」

私の発言に、今度は真央が声を上げた。

「まあ見てなさいな」

「バカが変なことするんじゃないわよ？」

「誰がバカだつて？」

「まあまあ、そんな喧嘩ばっかしてても良くないよお」

真央の声に、加奈が言い返してこなかったなので、私は取りあえず立ち上がった。

「私が配偶者よー!!」

いきなり大声を上げたことにより、クラスメイトの視線が私に集中した。

「うるさ!？」

うん、私も流石に大きすぎたと思ってるよ。

「志保ちゃん、取りあえず座ろつかあ」

真央に言われたので言うとおりに椅子に座りなおす。

「あんた、やっぱりバカでしょ」

「うるさい!」

みんなだつて、少しは迷ったりするかもしれないじゃん!

「もしも、みんなが配偶者の真似をしちゃったらあ、どうなると思  
う?。」

え〜と…。

「みんな配偶者に見える…かな?」

「そしたら、見つけづらくなるだけでしょ。もう、今の作戦は逆効  
果になっちゃったかもねえ」

どういうことだ?

「頭傾げてるんじゃないわよ。私達が思いついたことが、あなたの  
行動によってみんなも考えついたかもしれないってことよ」

「なるほど!」

「あはは。まあ大丈夫だと思うけどね、それより早く食べちゃおうよあ」

気がつくとお弁当を広げている人は私達だけで、みんなはしゃいでいた。

「志保、一緒に行くか？」

帰りのHRが終わった頃、これもまた毎日のように圭吾の呼ぶ声がした。

「うん、ちょい待って」

鞆を持って圭吾の隣まで行くと、田中涼もいた。

「はい、お待たせ！」

A組でバスケット部に所属しているのは、私を含めてこの三人。

バスケット仲間ということで、それなりに仲が良かったりする。

「志保、ちょい待って！」

三人で歩き始めようとした時、真志の呼ぶ声が聞こえた。

「どうしたんだあ？」

「涼、お前を呼んだつもりはない。気持ち悪い声を出すな！」

「言われたな…、俺らは先行ってようぜ」

そういつと、圭吾は涼を引きずって体育館の方へ向かっていった。

「それで…なに？」

朝のことがあって、なんか気まずい。

「様子おかしかったし、大丈夫になって…ね」

「あんたの方が大丈夫なの？ その…、手加減した覚えないし」

「ああ、俺の足か？」

「……」

「大丈夫だって、骨にひびが入ってるかもしれないけどな」

そういつて、真志はなぜか笑った。

「それは大丈夫って言わないでしょ！」

「いやいや、俺の大丈夫の定義はいくら糖尿病でも人生楽しんでりや、大丈夫なのさ！」

なんで、糖尿病？

「意味分らないわよ！」



「声でかいぞ。取りあえず、俺よりもお前の方が大丈夫に見えないって言うてるのよ」

本当に意味が分からない。

私は真志を傷つけた本人なのに、なんで心配されてるの？

「妹がね…」

なぜか、私は悩んでいることを話始めようとしていた。

「妹って、違う高校に行った双子か」

なんで知っているんだろうと思ったけど、気にせず話続けることにした。

「そう。その妹が部活で苛めにあって、大好きだったバスケットボールをやったのよ！」

私はバスケットボールが好き…、妹の美保も私に負けないくらいバスケットボールが大好きだったのに…。

「私は美保が部活を止めるまで、苛められてたことに気付いて上げられなかったの！ 毎日あっているのに気付いて上げられなくて、何もして上げられなかった自分にどうしようもなくイライラしてたのよ！」

自分に対してのどうしようもない怒りを真志にぶつけても意味が無いことは分かってる。

分かってるけど、このどうしようもない怒りを止めることができない。

「何でも話し合える双子だと思ってたのに、なんでも分かり合える姉妹だと思ってたのに…」

そして、美保に頼ってもらえなかったことが悲しかった。

私と美保との間に、小さな壁でもあったのかって不安になったのかもしれない。

「俺には志保の気持ちも、その美保って子の気持ちも分からないけど…」

ずっと、聞いていた真志が急に話し始めた。

「悪いのは苛めた奴でお前じゃないし、美保が志保に話さなかったのも心配かけたくないって思ったからかもしれない…。お前も自分でどうにかしようってする性格だろ？」

「そうだけど…！」

「そうなら、美保の気持ちも分かってやれよ。苛めだったら、まだ解決してないかもしれないだろ」

「分かってるわよ！」

「だから！ 少し落ち着いて考えろっての！ お前さ、冷静さが欠けてちゃんもしてやれないぞ」

「で、でも、私に何が出来るのよ!」

そこで真志の答えが詰まったことによって、一瞬静かになった。

周りが私達のことを見ていること気付く、そういえば、大きな声を上げてしまっていた気がする。

「分からねえよ…」

周りに気を取られている時、真志が呟くように声を発した。

「分からないくせに怒鳴るんじゃないわよ…」

今の間で、少し冷静さを取り戻せた。

「でもよ、何も出来ないのにイライラしてたっしょうがないだろ」

「そうかもしれないけど…」

「俺に出来ることがあったらなんでも協力するし、お前がそうなくてほしくなくて美保は話さなかったんじゃないか?」

確かに、学校でも意識しなきゃ平常心でいられない感じだったけど。

「…まあ、ありがと。そろそろ部活に行かなきゃ」

真志の言っていることが正しいのかどうなのか、私はバカだし分からない。

「あ、ああ…、引き止めて悪かったな」

それでも、少しは参考にすることにしよう。

「それにしても、たまに優しいと気持ち悪いわね」

「だまっとけ！」

取りあえず、話したら少しすっきりしたから、それだけでもよしとしよう。

ていうか、真志のこれはお節介過ぎるわね。

人によつては引くわ。

人によつては…だけどね。

#### 04・板垣 志保（後書き）

書き始めてから思ってたのですが、登場人物が最低40人って多すぎですよね…^^；

頑張って行きますけどね！！

それにしても、一人の視点で書くのは一話だけって感じで進めているので、書きたいことが多すぎて今回は長くなってしまいました^^  
^；

途中で読み飽きそうだった教えてください。

次から気をつけようと思います！

話は変わりますが、最近席替えがありました。

席替えの理由が、隣同士だった級長と副級長が別れたからです。

05・市原 達哉

「やはり、今年の入学者は楽しませてくれそうじゃ」

そういつと、校長は笑い始めた。

「と、言いますと？」

「頭の切れる奴が多いと言うことじゃ、だが、“配偶者”に選んだ奴も馬鹿じゃない」

「はあ……」

校長は楽しんでいるようだが、担任としては迷惑な話だ。

このことについて、問題が発生した場合は全て校長が対応するとは聞いている。

現に、親御さんからの電話をしているのを何回も見ているが、こんなばかげたことはやめてほしいものだ。

「これからが楽しみじゃ。まあ、変な奴も多いがな」

初めて担任についた以上、普通のクラスを持ちたかったなあ。

「いざ、出陣じゃ……」

我は今から、恋愛という青春に欠かせないものを手に入れるため、組というあの戦場に同志を連れて戦いに行くのだっ！！

「行つてらっしゃい」

「待てえいつ！！」

「なんだよぉ、早く一人で行つてくればいいじゃん。可愛い子がいたんでしょ」

「だから、同志と共に行かなければ勝てる見込みがないのだよ！！」

「なんの話だよぉ、早く一人で行つて来いよ」

香取義人め、俺がモテないことを知つてて言っているんじゃないだろうな。

「お前が行くことは決定だ。まだまだ、同志が足りんぞ！！」

こいつは男のくせに可愛い系だからな、かつこいいやつを探すか。

「そのサッカー部ペア！」

手始めに、相沢一郎と清水淳平に声をかけることにした。

「俺はいくら誘われても、ナンパのようなものはやらんぞ」

ようなつていうか、まるっきりナンパです。

「淳平はどうだ？」

「止めとくよ、俺にはこいつがいるから!!」

そういうと、何処からともなくサッカーボールを取り出して抱きしめた。

バカで気持ちが悪い。

諦めよう。

「ねえ、さっきからなんでずっと無視するんだよぉ」

「副音声は切っておいた気がするんだが」

「何言ってるの?」

「次は、あっちだ!」

いつものように真志、……と山下雅史?

「だから、無視しないでってばぁ」

異質な組み合わせに見えるぞ。

真志は誰とも仲良くするけど、雅史は恐いし恐いから、あまりクラスに馴染んでないように見えただけだな。

「なんで一緒にいるの」

つい、口に出てしまった。



「あ…?」

「ひいーっ!!」

いきなり睨まれたよお…、殺されそうな気がするよ!?

「おお、達哉か。普通にしゃべってただけよ…って、怯え過ぎだろ」

「今、ライオンに追われたシマウマが必死に逃げるのが分かった気がする…」

ライオンに睨まれるよりこっちの方が恐いかも…。

「おびえてないで早くしないと、時間なくなっちゃうよ?」

義人は睨まれていないから言えるんだ!

って、行く気になってる?

「ああ、またナンパかお前は。今度は何組だ? それとも先輩?」

「戦いに行くんだっ! んでC組」

「俺は行かないけどね」

「なら聞くなよ!!」

ちょっと期待したじゃねえか。

「C組：か」

なんか、雅史様が食いついた！？

「行きますか、兄貴！」

「黙れ馬鹿」

「すみませんごめんなさい申しません許してください！！」

恐ろしいよこの人！？

“柔道部の大男” 寺島雄一と喧嘩したとき、この人圧勝だったらしいんだよなあ…、未恐ろしい！！

「後で行くかもしれないがな」

「はい？ 今なんかいいましたか？」

ちよいと声が小さくて聞き取れなかった。

「黙れ下等種族」

「すみませんごめんなさい申しませんお許し下さい、ああ僕もう無理！」

下等種族って何さ、同じ人間じゃないの！？

もう逃げ出すことにします！

根っからのびびりなのです！

「恐かったよぉ〜パパぁ〜」

「気持ち悪いよぉ〜、近寄らないで」

「くそ、気を取り直して次だ！」

黒川直貴と小林航史の仲良しコンビを目指す。

「直貴、お前しかいないんだ！」

「分かりました」

「よっしゃー!!」

やはり、確実な所から行くべきだったな。

「直貴…お前あほだろ…」

「航史も来るよな！」

「直貴が行くなら別にいいけど、またナンパか？」

「分かってるじゃん！」

よし、なかなかの戦力をゲットだぜ。

毎回このメンバーだったりするんだけど。

「ほら、あの子だよ、あの子!」

「組到着っ!

そしてお目当ての美女を教える。

「確かに可愛いじゃん」

「うわあ〜」

「私だけ見えません…」

みんな納得の美女のようだ。

「あの容姿にして、勉学、運動ともに優秀らしいぞ! お名前は春香さんだそうだ!」

「そんなにすごいんなら彼氏の一人ぐらいいるだろ」

「それが、そんな情報は見つからなかったのだよ!」

もうこれは、アタックするしかない!

「ということで義人、逝って来い!! いや、行ってこい」

「なんでいきなり押すの!? ということって何!?!」

いろいろ騒いでいるが、しばらくすると諦めたようにため息をつ

いて春香さんの方へ向かっていった。

なんだかんだであいつが一番優秀だなあ。

「本当に行くんだな」

「やっと見えました…、どのお方ですか？」

「さてさて、どうなる？」

「あ、あのさ、君が春香さん？」

「はい。そうですが、何か？」

やはり、いきなり話しかけられたら警戒するよな。

義人ファイトだ！！

「みんなに聞いているんだけどさ、配偶者って話知ってる？」

「…話は知ってるけど、教えるほどのことなんて知らないわよ？」

「単刀直入に、誰が怪しいか教えてほしいんだよね。勘でいいから」

よし、早いかもしれないが、義人の知り合いとしてそろそろ行こうとしてよう。

「そう言われても…、あ、雅史君とか疑われてたりしてる？」

「だよね、だよね！！俺もそう思うんだよ！！何でかって、取りあえず目が恐いでしょ、それでもって、目が怖いじゃない!？」

可愛いだけじゃなくて話も合うんじゃないか!？」

「いきなり、うるさあ…」

「えっと、誰ですか？」

「申し送れました。私は黒川直貴です」

「なんでお前が一番前にいるんだよ。俺は航史、よろしくな」

「あ、えっと、よろしくお願いします」

この馬鹿！

なんで俺を蹴り倒しますか!？」

「あつと、僕は香取義人です」

「わ、私は山下春香です」

「「え!?!」」

もしや!？」

「うるせえ、下等種族!! てめえら、何やってんだ!?!」

「あ、お兄さん」

「「やっぱり!?!」」

「だから、うるせえ!」

「私は用事を思い出しましたので、先に帰らせていただきますね」

「俺も」

「ぼ、僕も!」

「ちよつとまって!?! 僕だけ、胸倉捕まれて宙に浮いてるんだけど!?!」

「お兄さん!?!」

春香さんは優しいなあ…、お兄さんときたら無言でにこやかに睨んできますよ。

「ご愁傷様です」

なんか今までの出来事が瞼の裏にものすごい勢いで見えるんですけど…、これって走馬灯って奴ですか?

「僕は悪くないよね…?」

「当たり前だ馬鹿、あいつが元凶であって生け贄だ」

「何言ってるんだ?! お前等も逃げんなよ?」

「「うえ!?!」」

「あはは…ごめんね」

「ごめんで済むか!?!」

「そういえば、春香さんに彼氏が出来ない理由が分かったね」

「おい待て、俺だけ置いてみんなで逃げたことはまだ許し取らんぞ!?!」

あの後、雅史お兄さんの拳により一発で意識が飛んだのですが、薄れていく視界の端にこいつらの逃げる姿が見えたのです。

「てかさ!?! なんで、俺だけ学校休むほどの怪我してるのに、君達は平気なのかな!?!」

「ああ、それは春香さんがかばってくれてさあ」

「はい!?!」

「必死になってたところ、めちゃくちゃ可愛かったなあ…」

「義人、お前は俺の手で殺したる!?!」

俺はそんなの見てないぞ!?!



「がはっ！」

暴れようとしたら、身体中に痛みが…。

「無茶するなって」

「なんかめちゃくちゃ損した気分…」

「実際に損してるよねえ」。今度は素直について行くから、元気出せよ」

「そっだ！ 俺の青春はこれからだー！」

と言っても、しばらくは安静にしてなくちゃなあ…。

## 05・市原 達哉（後書き）

コメディ路線で行ったつもりでしたけど、どうだったでしょうか？

私事ですが、明日まで期末テストだったりします^^；

ということで、大分書くのが遅れていますが、週一回は更新していきたいと思います^^

## 06・井上 桜

私は井上桜、吹奏楽部をやってるんだけど、同じクラスに吹奏楽部のメンバーがいないのが残念。

趣味が合わないとなかなか自分からしゃべれなかったりするからだ。

「そうなの？」

「うん、隣のクラスは席替えの話が出てきたんだよ」

でも、今岡恵里ちゃんは別。

この子は、自分から私の方へ話しかけてくれて助かった。

「私達のクラスは全然よね。出席番号のまま」

「だよねー、隣は来月までにはやるらしいよ」

私達のクラスは今行ったとおり、出席番号順で席が並べられてるままなの。

詳細にいうと、左前から縦に1番から並んでるの。

6列で、5列までが7人ずつで6列目が5人。

私は窓際の前から6番目で、恵里は7番目。

「先生に聞いてみたら？」

「桜ちゃん聞いてよー」

「私？」

そついうの、あんまり気が進まないんだよね。

「うん、というか一緒に行ってみよー」

「今はないけどね」

「…あとにしますかー」

「そうね」

「あ、そういえば、好きな人とかいないの？」

「えっ！？　なんでいきなり？」

一人、頭に浮かんだ人が居たので驚いた。

「いやいや、いきなり何も、気になるでしょ」

「恵里はどうなのよ」

「私はねー…。って、私が言ったら教えてよ？　いないとか無しだからね」

「わ、分かったわよ」

「ごまかせないわね…。」

「それで、私は…龍道裕也くんかな」

「ああ、剣道部の？」

確か、中学校の時からやってて、相当な実力者だってきいたことがある。

「そう！ 私、一回だけ試合を見に行ったことあったんだけど、とってもかっこよかったんだよ！！」

「そういえば、同じ中学校だっけ？」

「いや、違うよ」

あれ？

「違うのに見に行ったの？」

「自分の学校のチームの応援で行ったんだよ。それで、私の好きだった人を一瞬で倒しちゃったんだよ！」

「そ、そうなんだ」

好きだった人は、なんか可哀想ね…。

「スパアッ！！ って感じ！？」

元気いっぱい、ついていけないわ。

「かつこよかったんだね」

「そうそう！ もう、最高だったよ！」

「それで、その人って今どこにいるの？」

「え！？」

いけないことを聞いちゃったかしら？

「えっと…」

「クラスメイトにいるじゃん！」

「そうだったけ！？」

というか、よく一緒のクラスになれたわね！

「知っててこの学校に入っただの？」

「たまたま」

「奇跡ってあるのね…」

「運命だよな、きっと！」

「え、ええ」

本当にそうなのかもしれないわね…。

「あ、先生来た」

休み時間が終わってよかったわ…。

「先生待ってください！」

たまたま4時間目が担任だった。

なので、恵里は先生が昼食を食べに行く前に呼び止めた。

「ん、どうした今岡？」

私も一応気になるので一緒にいる。

「席替えっていつするんですか？」

それを聞いて先生は何故か嫌な顔をした。

「あつと……、しない」

「え？」

「このクラスは席替えをするなって校長に言われたんだよ」

「なんでですか!？」

私はなんとなく会話に入らないで、ただ先生を見ていた。

なんとなく、先生も納得してないように見える。

「なんでって言われてもな…、わるい」

そついうと先生は行ってしまった。

「席替えは残念ね」

席に戻った私達は、取り合えずお弁当を出して昼食にすることに  
した。

「ホントだよ！ 楽しみにしてたのに…」

「校長が命令なら仕方ないけどね」

明らかに職権乱用だけど。

「あ、いきなりなんだけどさ」

「何？」

「桜ちゃんの好きな人って誰なの？」

「ほえ！？」

本当にいきなりね！！

変な声を出しちゃったわ…。



「龍道さんの隣の席になりたかったのになあって思ってたら、思い出しちゃった」

「そ、そうなの」

「ここは言うべきなのかしら…。」

「ほら、私が言ったら教えてくれる約束でしょ？」

「そうだったけ？」

「そうだよ！ 忘れたなんて言わないよね？」

「なんか、恵里がニヤニヤしているように見えるけど、言わなきゃダメよね。」

「私の好きな人は野崎くん…かな」

野崎泰明くん…、話したことはないけど、一番気になる存在なのは確かなのだ。

「え！？ あいつじゃないの？」

「そういうと、私を…いや、私の後を指差した。」

「そうだったのか桜！！」

「なんで聞いているのよ淳平！ あう、声が大きいわよ」

後に居たのは、同じ中学校だった清水淳平だった。

同じ中学校って言ったら、森本恵ちゃんもそうだ。

「俺が話す機会でも作ってやろうか？」

「勝手に聞いてしまつてすまない。淳平が遊びに誘おうってな」

「えっと、遠藤さんと…」

遠藤くんは目立つ人で話したことはあるけど、この人は誰だっけ…。

「お前だけ、名前すら覚えてもらつてねえな！」

「淳平、調子に乗るな。俺は相沢です」

「相沢くんね…、ごめんなさい」

それにしても、みんなして聞きすぎじゃない！？

「私もいるよ？」

「井上だっけ？ お前も一緒に遊ぶか？」

「いやいや、お前さんはどうでもいいよ。それより、遠藤くんは野崎くんと仲は良いわけ？」

淳平はどうでもいいって、可愛いそうに。

「俺は誰とでも話すからね」

確かに私たちも、何回か話したことあるわね。

って、もしかして…？

「よし、行ってきたー！」

「おっけえー」

「よくないわよ！？」

私の叫びも空しく、遠藤くんはいつも通り読書に勤しんでいる野崎くんへと近づいていく…。

「どうする気なの？」

「「さあ？」」

「ちよつとっ！」

話したいって気持ちもあるし、遠藤くんを信用していいのよね？

「まずは友達になれればいいと思うぞ」

「俺は楽しけりやなんでもいいや！」

「そっいつ発言はよくないよ」

「ん、そうなのか？」

この人たちは楽しそうでいいわね…。

「そういえば、遊ぶってこのメンバーのつもりだったの？」

「恵も誘ったんだけどさ、私は勉強します…だってさ」

「声まね下手っていうか、ただ気持ち悪かったよ」

「うるせえ！」

「本当のことだからしょうがないだろ」

中間テストがもうすぐだもんね。

「だってよ、せっかく部活が休みなのに遊ばないってどうよ！？」

「いや、勉強するために部活がないんでしょうが」

「もっともだ」

「あ、遠藤くん、どうだった？」

にぎやかに騒いでいる間に遠藤くんが帰ってきた。

「野崎も一緒に遊ぶことになった」

「「おおっ！」」

「そ、そうなの！」

ちょっとうれしいかも…、言わないけど！

「取りあえず、放課後に駅で集合ってことで」

「分かったわ」

「んじゃ、またあとでな」

そういうと、遠藤くんは二人を連れて行ってしまった。

「それにしても、急な」

「ちょっと待って」

私が言い終わる前に、恵里の携帯電話が鳴った。

どうやらメールのようだ。

「ふむ…、それでなんだっけ？」

「あ、ああ、急な展開になったわねって思ったの」

「そうだよねえ」

でも、楽しみ…。

「あれ、ほかのやつは？」

野崎くんは駅で待っている私を見つけると、読んでいた本をしまった。

「えっと…、恵里はいきなりいなくなっちゃって、男子の方は分からないわ」

学校が終わり、楽しみと不安な気持ちで恵里と駅に来たところまではよかったんだけど…。

恵里は、今言った通りいきなり居なくなっちゃったのだ。

『桜ちゃんごめん、あっちから私を呼ぶ声がするの!』って言って、走って行ってしまった。

どんだけよ!

「あ、今メールきた、三人とも遅れるだって」

「そ、そうなんだ…」

駅を集合場所にした時点で気付くべきだったわ…。

だって、学校で集まって一緒に行けばいいだけだもの…。

その時、今度は私の携帯電話が鳴った。

「あ、ごめんなさい」

見ると、メールが一度に4件…。

一つ目は恵里からで、

『いい状況を作ってあげたんだから、明日までに結婚ね』

明日までって何!?

というか、この状況は遠藤くんのせいでしょ。

二つ目は淳平から、

『暇』

……えっと。

三つ目は相沢くんかな?

『相沢です。淳平からメールアドレスを教えてくださいました。登録  
よろしく願います。』

なんで同じタイミングだったのかしら…。

四つ目は遠藤くんね。

『今日はスムーズに話せるようになっていいたと思うぞ。目標は、メ  
アド交換ってとこかな』

そうよね…、これは参考にしよう。

てっきり、私の周りには助けになってくれる人が居ないと思ったわ。

「取りあえず、どっか歩いてるか？」

私がメールを見終わると、野崎くんの方から話しかけてくれた。

「は、はい！」

「井上桜さんだよな」

駅近くにある川沿いの静かな散歩道まで来た時、いきなり名前を呼ばれた。

「はい！ あ、桜でいいですよ」

「分かった」

「みんなの名前を覚えてるんですか？」

「全員じゃないけど…というか、桜さんって良く俺のこと見てませんか？」

「気付いてたの！？」

「えっと…、はい」

「…俺って、恐いすかね？」

私は、その言葉の意味がよく分からなかった。



「どづいづいと...?」

というか、見ていたことはよかったのかしら...。

## 06・井上 桜（後書き）

ちょっと無理矢理な感じになってしまった^^；

次は、今岡恵里視点です！

そういえば、友達がこんなことを呟いてました。

『イケメンになりたい』

## 07・今岡 恵里

『龍道も遅れていいなら来れるぞ』

遠藤くんからのメール。

「ふむ…、それでなんだっけ？」

私は、恋する乙女今岡恵里です

…気持ち悪いと言わないで。

「あ、ああ、急な展開になったわねって思ったの」

そう、今から私と龍道くんの恋物語が始まるのです！

「そうだよねえ」

想像するだけで幸せ…。

「あ、そういえば、辻斬り事件があったらしいよ！」

恋焦がれているのもいいけど、噂の話も大切です。

「今の話は終わり！？」

「それは放課後の話でしょ」

何を言ってるんでしょうか？

「・・・そう、それでどんな事件なの？」

「うんとね、狙われたのはなんと隣のクラスの男子さん！」

名前は別に必要ないと思うよ。

えっと…、もう登場しないというか、登場すらないし…。

「あら、かわいそうに」

「うんうん、それだけでいいよ。でね！　　こういう犯行かといいま  
すと、後ろから鈍器でガンッって感じ！」

「じゃあ、犯人の顔とかは見てないの？」

「一応見たらしいけど、覆面さんだったらしいよ！　　そして被害者  
は、病院送り」

「そう…、凶器というか、犯行に使ったのは？」

「それはねえ…、タンタカターツ」

かっこいい効果音を軽やかに言って、鞆の横に置いておいたもの  
を取った。

「木刀ね…、どこから持ってきたの！？」

「龍道のに決まってるじゃん。いらなくなったのだよ」

「決まってるの…」

深く考えたら負けだからね

「あ、冗談だよ。なんで、そんなに本気にしてるの？」

あまりにも桜ちゃんが寂しい目で見えるから、つい本当のことを言っちゃったよ。

「そうよね。私、疑ったりしてないわ！」

「何その反応！？ ちょっと待ってよ、流石にストーカーみたいなことはしないよ？」

ショックだよ・・・、友達に変な目で見られてたよ…。

「わ、分かってるわよ！ 気にし」

と、その時にチャイムがなった。

「取りあえず、放課後頑張りましょう！」

「そうねえ…」

そういつて前を桜ちゃんは前を向いた。

はてさて、次の授業は教室でいいんだよね。

「わくわく」

待ちわびていた放課後になってまいりました！

「なんで、恵里がわくわくなの？」

そういえば、桜ちゃんに言ってなかったな。

「実はね…。いいや」

わざわざ言わなくていいか。

「何よ、それ」

「いいからいいから、早く行きましょう！」

先に行つてつて、遠藤君からメールきたんだからね。

「駅の近くよね」

早速着いちゃいました！

「うん、ここらへんでいいと思うよ！」

「なんで、あなたが浮かれてるの？」

「だから、なんでもないって！」

どうでもいいけど、隠しておこう。

「そう…、ちょっと気になることがあるんだけど」

「なあに？」

おっと、携帯電話がなってるぞい。

誰からかな？

「昼休みに話していた辻斬り事件の犯人って」

お、遠藤君から、なにになに？

『今岡は一旦、俺達と合流しようぜ。川沿いの方にいるからさ』

「桜ちゃんごめん、あっちから私を呼ぶ声がするの！」

恋愛というなの青春が私を呼んでいるわ

「聞こえないよ!？」

私は、そそくさと川沿いに向かって走り出すことにした。

「あ、頑張ってね」

「本当に行っちゃうの!？」

「大丈夫だつて！」

心配ないでしょ、あんなに可愛いんだから。

「はあ……はあ……」

川沿いに行くと、遠藤君と相沢君、清水君がいた。

「息が切れまくってるじゃん！ 急ぎすぎじゃね？」

「うるさ…いつ！」

「それよりも、野崎がそろそろ合流しているはずだから、メールでも送ってやろうぜ」

「さつき、遅れるってメールしたんだよな。というか、俺は井上さんのメアドをしらない」

「うう…、疲れててしゃべれない。」

「俺が教えてやるよ。というか、遊ばないの？」

「俺等は遊ばないけど、楽しむのよ」

「意味が分からないぞ」

「はあ…、それより、龍道くんは！？」

「ああ、川沿いで待ち合わせだけど、もうちょい遅れるみたい。俺等はメールを送ったら解散するよ」

ちよっとドキドキしてきた！



「きた。教えてくれてありがとな」

「ほいほーい」

相沢君は、清水君に桜ちゃんのメアドを教えてもらったようだ。

「それじゃ、みんなでメールを送ってみますか」

「俺は初めて送るからなあ…」

「送るも何も…、これでいいや」

「あ、私もか」

こんな感じのメールでいいかな。

「「そーしん！」」

「つて、何で声が重なるの!?!」

今のは重なるところじゃないような…?

「いいじゃん別に」

「そういう言い方はないだろ」

「俺等は今行くぞ。あ、井上の方は誰が行く?」

「ああ、そんな話してたな。俺は行かないけどよ」

「だから楽しむのね。よし、俺が井上だ！」

なんの話だろう？

「よし、んじゃ行きますか」

「ありがとね！」

三人とも歩き出したので、その背中にお礼を言うことにした。

「ああ」

よし…、ここからは一人で頑張らなくちゃ！

「それにしても、緊張するよお…」

「えっと、今岡さん？」

「はいっっ！！」

いきなり後ろから声が！？

と思ったら、龍道君だった。

「えっと、驚かしちゃったかな？ ごめん」

「そ、そんなことないです！」

とうとう来たんだ！

って言っても、五分も経ってなかったり…関係ないわね。

「他の人たちは？ 俺は遠藤に誘われたんだけど…」

「分かりませんわ。ど、どうしたんでしょうね？」

ちよつと敬語になつてますわ！？

「お、メールだ」

「あ、私ですわ！」

またもや遠藤君からだわ。

『落ち着けよ！！ なんかあつたら助言してあげますから！』

どこかで見ているようなタイミングね。

でも、そうよね！

落ち着くのよ私…。

「三人とも遅れるらしいぞ。あと、聞いてるか分からないけど、寺島は来れなくなった」

「寺島くんって、柔道部の人でしたっけ？」

そういえば、二人でいるところを良く見ている気がする。

「なんか、メールで『ごめん、行けなくなった。だから、一人で行け!』ってきたんだよな」

「何があつたんだよ?」

ちよつと気になる…。

「電話が繋がらないから分からん。それより、他にいないんならしようがないな」

「え?」

「二人でどっかに行こうぜ」

これはデートという奴では!?

「はいっ!」

と、進行方向の先の方に桜ちゃんと野崎君が見えた。

「あつちに行きましょう!」

「え? あ、分かった」

ここで一緒になっちゃったら、二人きりじゃなくなっちゃう!

「ちょ、ちよつと走りましょう!」

「え？ どうし」

それは嫌だ！

「いいからっ！」

「ふう…」

ここまでくればいいでしょ…。

「手を離してもらってもいいかな…」

そう言われて握っている手を上げると、龍道君の手も上に上がった。

「あつ、ごめんなさい！」

「いや、誤らなくていいよ」

私って、なんて大胆なの！？

「結構走ったように思うけど、大丈夫？」

ああ、龍道君の笑顔が眩しいわ…。

いきなりだけど、これは告白のチャンスなの！？

「大丈夫です！」

どうしよ、どうしよ！

「あそこの公園まで行って、休もうか」

そう言つて、龍道君が指差した先には小さな公園があつた。

「ちょっと、ごめんなさい」

公園のベンチに座つたところで、携帯電話がなつた。

『確かにチャンスかもしれない！ 頑張るんだ！』

遠藤君からだつたけど…、心も読めるのかな。

「俺、することあつたんだ！ そろそろ帰らなきゃ！」

「え！？」

ちよつとちよつと！

もうチャンスは今だけなの！？

「…一つだけ言いたいことがあるんだけどいい？」

とつさに言つてしまった！

もう言つしかないのね…。

「…？ いいよ」

私は大きく深呼吸することにした。

うん、少しだけ落ち着いたかも。

「龍道君のことが、前から好きでした!」

ありきたりな言葉だけど、私にはとっても大切な言葉。

私の気持ちよ、届いて!!

## 08・遠藤 真志（前）

「俺たち行けなかったけど、昨日はどうだった？」

俺は遠藤真志、誰にでも優しく、仲良くするコミュニケーション能力抜群の天才だ！

…ちょっと調子に乗りすぎました。

「なぜか、井上と二人だった」

井上と野崎のその後が気になったので、次の日の朝、野崎の方に聞いてみることにした。

「たまたまだぞ、俺はなんもしていない！」

「…そうか」

とか言いつつ、聞いたのはもう先週の話なんだけど、あの日の出来事を回想してみよう。

「取りあえず、静かな所を求めて川沿いの散歩道まで歩いて行って」  
「」

「…俺って、恐いすかね？」

なんとなく、俺は井上に尋ねていた。



「どういつこと…?」

数秒の沈黙の後、不思議そうに尋ね帰されてしまった。

「今まで、苛めようとしてくる奴と相手にしないような奴ばかりだったから」

俺はなんでこんなにしゃべっているのだろう…、こういう性格じゃない気がするんだけど。

「じいちゃんに合気道をずっと習っているから、苛めてくるような奴もいずれはしなくなる。最終的には、無口な俺は友達ができなかったんだよ」

一秒ほど待つて、何も言わなかったので続けた。

特に悲しい訳でもなんでもなく当たり前だったことを、俺はなんでもわざわざ他人に言っているんだろう。

「…なんでもない。気にしないでくれ」

なんか、ばかばかしくなったし、つまらない話だからやめることにしよう。

「野崎君は悪くないと思うよ」

少し戸惑った。

井上が俺の顔を見つめていたからだ。

「そ、そうか」

基本的に他人に相手にされたくないと思っているだけに、見られることに慣れていない。

だから、見られていたことにも気付いたのかもしれない。

「うん…、私が友達になるよ」

「は？ あ…、そう」

そんな答えを望んでいた訳でもなく、ありえないように思えた答えだったので、自分らしからぬ声を出した気がする…。

「友達なんだから、メアド交換しよ？」

なんだろう、この展開？

意味が分からない。

「あ、きたきた。ありがとね」

とか言いつつ、携帯電話を取り出したりしたんだけどね。

「……」

なんとなく、見られていた分、見つめてみることにした。

「な、何かな？ ……顔になにかついてる？」

「ちょっと、観察」

「えっ？」

初めて冗談を言ってみただけど、通じなかったようだ。

会話って難しい。

「熱でもある？ 顔が赤くなってるよ」

「いや、違うっ！ 大丈夫よ！」

「そっか」

「そのあとも、少し話しながら歩いてただけだよ」

ほむほむ、いい感じなんじゃないか？

「井上のことは…、好きか？」

「ああ」

マジで！？

「いい友達が出来てよかった」

「……そっか」

野崎が他人と話しているところも見ただけでも充分前進したってことでいいよな。

「そういえば、寺島は何があつたんだろ」

「またな」

その話題はよろしくないのだよ！

「……？」

寺島が腕に包帯を巻いて登校してきたのに、俺が関係しているはずがある訳無いじゃないか！

「遠藤…、お前もいなかったか？」

なんで寺島は、何の迷いも無く俺のところに来たんだろうっね…。

「なんの話？」

「いや、なんでもない…。そうだよな」

「すみません、本当はいました。」

どこにいたかというと、また回想になってしまうんですけどね。

「一緒にいたから、怪しまれないように一緒に誘ってしまったけど、

「どうするものか…」

今岡のために龍道を誘ったのはいいのだけれど、寺島も一緒に行くことになってしまった。

「よし、山下に頼むとしよう」

あいつならどうにかしてくれるだろうよ。

「放課後、時間空いてる？」

「んだよ、面倒なのは嫌いだぞ」

たく、そんなことを言っているのかな。

「弱みつつのは、いつでも使えるようにしてあるんだぞ？ ほれ」

といって、俺は自分の携帯電話の画面を見せた。

「…踏み潰していいか？」

どんなものが映っていたかといいますと、山下の待ち受け画像です。すね。

そこには彼女の写真とかじゃなく…妹の写真。

「マザコンって知ってる？」

「俺にも我慢の限界があるって知ってるか？」

「ちょっと調子に乗りすぎました。すいません」

「たく…、んで、何してほしいわけ？」

「寺島の捕獲」

「あいよ」

完璧だよな。

「…今日は美保か？」

これはさて、なんのことを言っているんでしょうか？

なんてね。

「そうだよ。それにしても、良く分かるな。見た目とか全く変わっていないぞ？」

「なんとなく違うだろ。雰囲気もな」

「流石、最初に気付いただけありますね。一応秘密ってことを忘れるなよ？」

「分かってる」

志保が美保にバスケットをやらせてあげるために入れ替わったりしてるんですよ。

この話はまた後で。

「んじゃ、また」

よしよし、状況は作ってあげたし、あとは高みの見物を楽しめますか。

ということで、俺は無罪です。

じゃなくて、山下がどうやるのか気になって寺島を捕獲する場面に居たんだよね。

一応、隠れてただけだな…。

「恵里、本当に大丈夫？」

「駄目、死にそう…、というか死にたい」

あ、今岡の方はどうなったか言ってなかった。

「桜ちゃんはいいいね。友達っていうか、もう彼女じゃん！」

「だから、そこまで行ってないって」

とかいいつつ、幸せそうにしている井上に対して、今岡の落ち込み具合を見れば…、どうなったか分かるだろ。

かわいそうに…。

『悪い、俺は剣道に生きるから』

なんの躊躇もなく、あっさりと龍道にそついわれちゃったんだもん。

なんだよ、気持ち悪い。

確かに、恋愛したら気の乱れとかそんな感じのことがあるのかもしれないけどさ。

「私…、今だったら飛べない気がするから、飛び降りていい？」

ツツコミどころ満載な事を言っただけで飛び降りようとしてるけど、あれはダメージが大きすぎる。

人生は、思い通りには行かないもんだね。

「って、誰か止めるよ！」

お、相沢はいい奴だな。



08・遠藤 真志 (前) (後書き)

長くなりそうなので、二話に分けることにしました。

題名の書き方、他にいいのあるかな…。

・ ・ ・ 遠藤 真志 (後)

『今宵、月はどこを照らすの?』

「うるさい!」

おっと、携帯電話のアラームに対して失礼だな。

でも、朝っぱらから耳元で質問されても、まともに答えられないで  
しょ?

「よし、今日も頑張りますか」

いつも通り、太陽より早起きです。

現在の時刻、3時半。

あ、今更だけど、ポルノ      イイの曲ね。

ポルノイイって読まないでね、隠してる意味がないから。

んで、俺は今から新聞配達に行つてまいります。

それではっ!

「起きてって、じゃまだから!」

「うう……、了解」

今日は美保かな？

若干優しい……気がする。

今身体を揺さぶられてるんだけど、その力加減かな。

毎日の日課で、教室に一番乗りに来ては板垣志保の席で永眠。

いや、起きるけどね？

「ほら、早く！」

「……やっぱり優しくない」

「喧嘩売ってるんなら、買っわよ？」

「すみません！」

この前見たく、椅子は勘弁してほしいしね。

別人だけどさ。

「こっちのクラスにも大分慣れたんじゃないか？」

「あれ？ やっぱり分かつちゃうの？」

「俺以外にも分かつてる奴はいるよ、山下とか米倉な」

米倉圭吾、友達思いのバスケ部だ。

「圭吾は前から知り合いだけど、山下も？ 私達って思ってるより似てないのか？」

「それはないから大丈夫だ。気付く奴がおかしいだけ」

他にも、栗原真央とかもだな。

そういえば、なぜか清水淳平も気付いてたっ婆いな。

あいつも地味にすごいのか？

「あ、今更だけど、アドレス教えてもらってなくない？」

「そういえば、そか」

えっと、携帯電話はどこにやったけな……。

「あれ？」

「どうした？」

「……ない!!」

ポケットに普段入れとくのに、内ポケットにもない！

どこにやったっけ!?

「お前、またケイタイなくしたのかよ？」

「いきなり、現れるんじゃない、淳平」

こいつは無視だ、俺の携帯電話の方が大切！

コトッ

「落ちたよ……、ケータイ」

「ださ……っ！ お前が天然キャラでも萌えないぞ？」

「うるさいー！」

そういえば、今日は珍しくアラームをセットして、机の上に置いたんだった……。

「……俺から送信するな」

「あいよ」

「……またって、なんだ？」

「ん？ ケータイの話か、別にいいだろ」

「俺が見つけてやったんだよ。廊下に落ちてたケータイをね。昨日の……昼休みだっけか？ まじ、天然キャラとか」

「何回もいうな！ てか、そんな話どうだってよくね？」

話題として微妙なもんを持ち出さんでよろしい。

ちょっと恥ずかしいから。

と、その時、学校にお決まりの音が響いた。

「お、チャイムなったし、そろそろ席に座ろうぜ。真志」

「そうだな」

「以上だ……。と、その前に、配偶者のヒントだそうだ」

校長から聞いたのか、担任の橋口先生は自然と配偶者の話を出した。

そういえば、今日から6月だったな。

「えーと、『配偶者』は」

その時、誰かの携帯電話がなった。

音の鳴った方向……。左斜め後ろを見ると、朝倉加奈がすいませんと言いながら携帯電話を取り出していた。

「次鳴らしたら、取り上げるからな」

「はい、すいません……」

と、俺の携帯電話が振動した。

マナーモードにしててよかった……、今のタイミングで携帯電話がなったら洒落にならない気がする。

「えっと、それで」

またもや携帯電話が鳴った。

というか、一人じゃない。

3、4人いる……？

「お前等、いい加減にしろ！」

「「すいません！」」

俺の携帯電話が振動したのは、メールのようだ。

状況がおかしい気がしたので、確認することにした。

『“配偶者”は文化祭に参加する』

はい……？

これはなんなんだろう、ヒントとしてはふざけてるだろ。

「たくつ……、ヒントをいうぞ！」「“配偶者”は文化祭に参加する」だ。HRを終わりにする」

「「……」」

「どうしたみんな、アホみたく口が開いてるぞ」

えーと……、マジですか？

俺の知らない人からのメールだしな。

アドレスは『a - s u s p i c i o u s - p e r s o n . @ - - - . n e . j p 』。

a s u s p i c i o u s p e r s o n . 怪しい者。

自分で言うな！

って、突っ込んだら負けなのか？

てか……、ヒントが分かるってことは配偶者からのメール！？

「次の授業に遅れるなよ。体育だろ？」

そういつて、先生は出て行った。

このメールの送り主は、なんで俺の携帯のアドレスを知っているんだ？

俺の携帯電話が無くなったのも体育の時間。

忘れたのか落としたのか、その時は野崎と先に教室を出たから分からない。



淳平が拾う前に誰かに見られたのか……？

他人が俺のアドレスを教えてしまったのだとしたら、全然分らないけどな。

「由香里もメール来たの？」

後ろの席で話し声がある。

「美咲も？ ていうか、美咲はケイタイ鳴っちゃってたか」

「ホントびっくりしたよ、取り上げられなくてよかった……」

「あのさ、メールってこれ？」

気になったので、俺に来たメールを見せる。

「遠藤君も、来てたんだ」

「見えなかった？ こいつはすぐケイタイ開いてたよ。すぐ後ろだから丸見え」

えっと、大塚由香里と尾前美咲だな。

このメールはクラスメイト全員に送られたのか？

「なんでこいつは俺のアドレス知ってるんだろっ……」

「いや、遠藤のアドレスはクラスのみんなが知ってるでしょ。こいつがクラスメイトなら、当たり前ね」

そういえば、そうでした。

吉井絹子っていう日本人的な綺麗さを持つてる奴のアドレスすら知ってるしな。

なんていうんだろう……、浴衣着るならこの人って感じ？

ごめん、まったくもって意味不明だね。

性格は、冷たい感じがしちゃうかな……。

『あなたも私を疑ってるんでしょ？ ……みんな互いに疑いあつてるなんてバカみたい』

配偶者の話を出したら、こんなことを言われちゃいましたよ。

悪い子じゃないけど、きついから友達少ないだろうね……。

ちよつと心配。

「それより、なんで私達のアドレスを知ってるかよね……」

「だよねえ……。そういえば、真央ちゃんが一回ケイタイなくしちやったよね？」

「あつたあつた。教室にあつたんだよね。その時に見られちゃったのかな……」

はてさて、他の奴もあの子にアドレス教えてないし……もしかし

てとかつて話てるけど、俺はそろそろ着替えないと体育に間に合わなくなっちゃうから会話から離脱するでしょう。

「……いきなり、脱がれてもお前に萌えとか」

「うるさいだまつとけ、いい加減にしつこい。お前はどこから現れるんだ！」

「そ、そこまで言うなよ！　一緒に行こうって思ったただけなのに……」

淳平が泣いたふりしている方が、萌えないただ気持ち悪いぞ。

というか、萌えをいまいち理解してないからコメントしづらいけどさ。

「真志君、ちょっと聞いていいかい？」

聞き覚えのある幼い感じの声が俺を呼んでいる。

「ん？　誰じゃ？」

後ろを振り向くと志野大輝っていうクラスメイトがいた。

俺調べによると、中学の時はめちゃくちゃ部活を頑張ってたらしいけど、今は帰宅部らしい。

何部だったんだっけなあ……、情報を集めすぎてこんがらがっている今日この頃です。

「志野か、お前も一緒に行こうぜ！」

「暑苦しいぞ……。大輝はそれで何が聞きたいの？」

「いや、一緒に行きましょうよ。待ちますから……。その時でいいでしょう?。」

「了解、急ぎます」

あ、さっきのメールアドレス登録しとこつと。

“怪しい者” っと。

「今は部活やっていないようですけど、何か運動部とかやってなかったんですか？」

「こいつは中学の時から帰宅部だってよ。運動神経いいんだから、やればいいのに」

「俺にもいろいろあるんだよ。てか、面倒だし」

正直に言くと結構貧しい家なので、部活じゃなく、バイトしないと学校行けないのよ。

いや、マジで。

我が家のお頭はお母さんで、お父さんはいないんでね。

「確かにそうですね」

「おうよ。親父からいろいろ習ってたからな」

空手、合気道、柔道、剣道などなど……、親父はなんでもできて最強でしたから。

問題は趣味ですなー、賭け事は良く出来てるね。

どつぷりはまりやがってですよ。

まあ、おかげで身体はある程度鍛えてあるって事で。

「やつぱりですか……。私は小柄ですから、強くなるのは難しいですよね……」

「強くならなかったって、楽しい人間の方がモテるんだぞ！俺のようーに！」

「そんな話してないから……、大輝だって、強くなろうと思えはなれるぞ。大変だけどなー」

てか、俺の場合、目標あって強くなったけど、結局目標を達成してないしな……どうでもいいけど。

「いえ、大丈夫です。問題ないですから」

「はい？」

「着きましたよ。それでは、ありがとうございました」

そういうと、大輝は先に走って行ってしまった。

「……なんなんだったんだろうな。あいつ」

「モテたかったんだろうよ。俺みたいに」

こいつに聞いた俺がばかだったな。

「ほに？ ……メールか」

時間は流れ、学校が終わってベットでごろごろしていると携帯電話がなった。

面倒だけど、メールを開いてみる。

『“配偶者”は女子の中にいる』

やはりというか、“怪しい者”からのメールだった。

・ ・ ・ 遠藤 真志 (後) (後書き)

言っただことが違っちゃったので修正しました^^;

年末までバイトで忙しいので、次の更新は来年になりそうです……。

09・大塚 由香里（前）

「お先に失礼しまーす」

よし、アルバイト終了。

あ、ファミリーレストランで働いてます。

「はいはい、ツカリンまったねー」

「変なあだ名やめてっつてば、いつも変わってるし!」

アルバイトで仲良くなった友達に突っ込みつつ、携帯電話を開いた。

「そんなことをないって、ツカツカー! それより、今度の日曜とかまたカラオケ行かない?」

あるバイト中は、マナーモードなので気付かなかったが、メールが来ているようだ。

「今月はお金ないのよ、また今度ということ。今度こそ、お先に失礼します」

そういつて、室内を出た。

登録していないメールアドレスだけど、見覚えがあるようない…。



『“配偶者”は女子の中にいる』

メールの内容を見て朝の出来事を思い出した。

多分、配偶者からのメールで間違いない……けど、このメールの内容の信憑性は薄いわね。

「でも、当てにしてみよう」と

女子を中心に、明日調べて見ましょう

同性の相手ともあんまり会話していなかった野崎泰明君が、井上桜ちゃんと話すようになったのも気になるし。

佐藤真子ちゃんが昼休みに教室に全くいないのも気になるしね。

他にも、いろいろあるし、たまには自分から配偶者探しに動いてみようっと。

（取りあえず、確実に違うのが市原達哉君と寺島雄一君だけなのよね）

今までのヒントは、『配偶者はA組の中にいる』

『配偶者は学校を休まない』

そして、今日の『配偶者は文化祭に参加する』……。

さっきのは外しておいて、寺島雄一君は今、学校で噂になっている“辻斬り”事件に巻き込まれてしまったのだ。

山下雅史君に殴られたり、蹴られたりしてても頑張つて学校に来てたのに、辻斬りの件で到頭学校を休んでしまった。

辻斬り事件……、このことから被害者の怪我は本当にひどいことが分かると思う。

「あ、噂をすれば……って、山下君か」

今歩いているのは、街灯の明かりしかない住宅街の道。

人気の少なく、正直、意識すると不気味で居心地が悪い。

山下君はまだこちらに気付いていないようだ。

右手に小さなレジ袋を持ち、左手で煙草を吸っていた。

隣には、かわいらしい女性……彼女だろうか？

不良っぽい（煙草吸ってるし）山下君とは正反対に、隣に並んでいる女性は真面目そうな子に見える。

見た目で決め付けちゃいけないかもしれないけど、明らかにぐれちゃっているようには見えないということね。

何か話しているようで、はっきりと山下君と分かる距離にきてもこちらに気付いていない。

と、山下君の後ろに人影が見えた。

「……ん？ 後ろ…ッ！！」

私の声とほぼ同時に人影は長い棒を山下君に向かって振り下ろした。

「…ッ！？」

私の声に山下君は素早く反応して、後ろに振り向きつつ何かを持っている手をはじいた！

「な……ッ！？」

人影は一瞬戸惑ったが、一步下がりにすぐに持っていたもの 木刀を握り直した。

「春ちゃ 春香、下がってろ……」

街灯に照らされていることと、自分自身が落ち着いてきたことにより人影の姿が見えた。

といっても、顔を布で隠しているために正体は分からない。

分かることは、私達の制服であることと足が長くて、身長が私ぐらいつてことくらい。

多分、こいつが辻斬り事件の犯人だろう。

「三人では無理だな……」

犯人が何かを呟いたかと思った瞬間、踏み込んできて再び山下君

に木刀を下ろそうとした。

「そんなんで……俺に勝てると思うなよ」

「なんてね」

と思いきや、何かを投げてきた。

近距離で投げられたため、山下君は避けられず、その何かが当たりはじけた。

「ッ……、ガソリンか？」

そう言われて、破裂とともに現れたにおいに気付く。

「それじゃ、またね」

そういつて、犯人はマッチを投げて走り出して行った。

「…ッ！」

「え……ッ？」

私の反応は遅れてしまった。

脳裏に最悪のシチュエーションが頭に浮かんだ。

山下君が死んじゃう？

「手……大丈夫？」

「わざわざ手当てしてくださいまして、ありがとうございます」

あの瞬間、落ちていくマッチを山下君の彼女……じゃなかった、妹君が取ったのだ。

……正直、危なかった。

一瞬の出来事で、私には何も出来なかったもの。

「わざわざ手当てしやがって、俺がやるっていったらどうが」

「ガソリン被ってて良く平気ね。早くシャワーに浴びてきなさいな」

結果から言うと、なぜか私は山下君の家にいる。

話を聞くと、両親は共働きで家には誰もいないということなので、妹君の手当てしてあげることにしたのだ。

その時に、この女性が山下春香ちゃん、山下雅史の妹ということを知ったのだ。

「あ、山下君じゃ分かりづらいから、雅史って呼ぶね」

「調子に乗るなよ……？」

「そんなこと言っちゃ駄目よ！ 由香里さんがいなかったら、もっと大変なことになってたかもしれないのよ？」

「……………ません、…………シャワー浴びてくるからな！」

妹君には弱いなあ…………、いきなり変な奴に襲われても、微塵もうるたえなかったのにね。

「それにしても、雅史って妹思いなのね」

山下君改め、雅史が見えなくなったのを確認して妹君に話しかけた。

「はい！ 本当に優しくしてくれるんですお兄さん」

「うんうん、いいことだね。私には中一の弟がいるけど、生意気でしょうがないもん」

お姉さんの私に対してため口ですから。

というか、命令口調ですから。

「…………でも、私がいると彼女さんもうくに作れないんじゃないかって思っこともあるんです」

「ん？」

妹君の顔が少し曇った。

「いつも私に付き合ってくれているので、遊ぶ時間も無いだろうし……………」

「気にしなくていいと思うよ。雅史が好きでやってるんだろうからね」

本の一時間前にまともに話したばかりだけど、それだけでも妹君のことを大切に思っていることが分かった。

「でも……」

「うだうだ言わないの。雅史に好きな人が出来たりなんかしたら、その時に考えればいいのよ。今を楽しまないと損よ？」

確かに、いつまでもずっと傍にいられるとは思えない。

だからこそ、今を楽しく過ごしてほしいって思った。

「……そうですね！」

その言葉と共に、妹君の今日一番の幸せそうな笑顔を見せた。

「よし、まずはお兄さんのシャワーを覗きに行きましょうか」

「え……！？」

「流石に冗談よ？」

この子、面白いわ。

「……いつまでいるんだ、お前」

やっと戻ってきた雅史の一言目がこれだ。

「あ、やっと出てきたわね」

「由香里さん、ガソリン被っちゃったんだし、仕方ないわよ」

「それもそうね、春香……って、それより、タオル巻いてるだけで女性の前に出てくるのはどうかと思うわよ？」

「それより、お前と春…香、仲良くなりすぎじゃないか……？」

「あははー、このまま、止まっていこうかな？」

「本当ですか？ 私は大歓迎です！」

「俺は大迷惑だぞ、おい」

「それより、早く着替えてきなさいっての！」

正直、クラスの男子の裸体見てて平然としていられるほど、私だって鈍感じゃないのよ。

「そうだよ。お兄さん、礼儀がなってないよ」

「……分かったよ、たくッ」

ふと時間を確認してみると、12時を回っていた。

「って、もうこんな時間!？」



アルバイトが終わってからだったし、よくよく考えればこのぐらの時間になっておかしくないけど、家に連絡してないから、帰ったら起こられるかも!？」

「由香里さん、急に慌ててどうしたんですか？」

「ちょっと、電話するね！」

携帯電話を取り出して、家に連絡の電話をしようとボタンを押す。

「あ、お母さん!？」

『ゆ、由香里!？ お、遅いから夕飯、先に食べちゃったから、残りもので我慢してね!-!』

「……………」

怒られなかったのはうれしいけど、なんか様子がおかしい……。

『あ、気をつけて帰ってくるのよ？ 時間も時間だからね。それじゃ』

「……………夕飯って何？」

『え!-?』

「夕飯のメニューは!-?」

『……………寿司よ』

やっぱり！！

我が家では代々（多分）、いいものを食べるときは、出来るだけ一人分の分け前を多くしようとする性格なのだ！

「それで、この時間でも私に怒らないのね！！」

『そ、そうよ！　こんな時間まで何してるのよ！　……遅く帰ってきなさい』

「おかしくない！？　もしかして、寿司だけじゃないでしょ！？」

『…二人で寿司を食べてたら、お父さんが帰ってきて、焼肉にしようって…ね？』

最初は弟と二人で食べてたのね……。

「あんたら、よくそんなに食べられたな！」

『……デザートは別腹っていうじゃない？』

「デザートじゃないだろ！？」

『奮発してケーキまで用意しちゃった……みたいなの？』

「誕生日より豪華じゃん！！　確実に、食いすぎじゃん！！」

前々から、自分の家族は変だと思ってたけど、ここまでだとは思わなかった……。

『そ、それじゃ、早く』

『お母さん、メロンも早く切つてよ!』

「は……?」

『……早く帰つて、こなくてもいいわよ』

そういつて、向こうから電話が切られてしまった。

「お前、声でかすぎだぞ。ボリューム下げろや」

電話が切れてすぐに、着替え終わった雅史が帰ってきた。

「うるさいっ!」

「……んだと?」

「今の電話聞こえてたけど、由香里ちゃん落ち着いて!」

「……いい加減帰れよな」

流石に雅史もイライラし始めているのが分かった。

「……春ちゃん」

「何かな?」

「ちよっ……!」

「ほら、雅史も普段通り、そう呼べばいいんじゃないかな？」

自分でも分かるぐらい、憎たらしい笑顔を雅史に向けた。

正直、八つ当たりです。

「お、俺がそんな呼び方するかよ!!」

「そうなの春香？」

「えっと……、由香里さんと会う前までは、今日も春ちゃんって呼んでくれていました」

「……寝る」

うわっ、雅史の顔がめっちゃくちゃ赤くなってる。

こんなの見れるなんて、今日になる前は思わなかったよ！

「変な顔……あははっ！」

「帰れ!!」

「夕飯食べたらね」

「そんなの聞いて」

「せっかくなので一緒にどうぞって、話してたんです」

「今聞いたからいいよね」

……雅史って、思ってたほど悪い奴じゃないかも。

呼び捨てしてて、すごく違和感あるけどね！。

## 09・大塚 由香里（前）（後書き）

更新が遅れてすみませんでした^^；

3日になる前に更新したかったのに間に合わなかったし……orz

そしてまたまた、前編、後編に別れてしまいました^^；

一人の話を一話にまとめるのは無理ですね；；

これからはほとんど、こんな形になっちゃうかもしれませんが、ご了承ください><

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5657f/>

---

配偶者は誰？

2010年10月9日16時42分発行